

(実践報告)

「音あそび」に関する実践報告

——特別支援学級および保育園における事例を中心として——

西田 治 (初等教育講座)

はじめに

本稿では、筆者自身が行っている音楽療法の考えや方法を用いた「音あそび」の実践報告である。今年度、実施した代表的な事例を紹介するとともに、今後の研究課題を見出すことを目的とする。「音あそび」という言葉は、一般的には手あそびやリズム遊びなど幅広い意味合いで用いられるが、本稿では、音楽療法の考えや方法を用いた活動をその対象とする。具体的には、音楽療法士によって実施されている音楽活動や丸山忠璋氏の提唱する「療法的音楽活動」を指すものである。

1. 「音あそび」について

(1) 実践に至るまでの経緯

筆者は、大学時代にノードフ・ロビンズ音楽療法に出会い、これを健常の子どもたちと実践できないか、と考え続けてきた。その思いが、本稿で紹介する「音あそび」の端緒である。

「音楽ともっと自由に向き合いたい。他者と共有したい」と人間と音楽の関係を模索していた当時の筆者にとって、初めてノードフ・ロビンズ音楽療法のセッションをVTRで見たとき、直感的に「求めていたものはこれだ」と感じた。VTRの中では、セラピストとクライアントは、教える-教えられるの関係でもなく、ただただ音楽そのものを共有しているように見え、それは音楽と人間の理想的な関係であるように思えた。それ以来、音楽療法そのものに興味があるというよりも、人間と音楽の理想的な関係の一つの在り方としてノードフ・ロビンズ音楽療法に興味を抱くようになった。

そして、まずは学校教育の音楽科の授業に音楽療法を持ちこむことはできないか、と考えるにいたったのだが、40人弱の子どもたちと一齐に行うこと、いかに評価を行うか、などの壁にぶつかり暗中模索の日々が続いた。その時に、出会ったのが丸山忠璋氏が提唱する「療法的音楽活動」であった。

(2) 療法的音楽活動との出会い

提唱者である丸山(2007)は、「音楽療法における音楽や人間に対する見方・とらえ方を学ぶうちに、音楽教育の領域にそうした理念や方法を取り入れてみたらどうかと考えるようになり、音楽授業を音楽療法のセッションのように展開する実践を試みてきた(p.28)」として、療法的音楽活動を以下のように説明している。

《療法的音楽活動》の理念の基本は、音楽療法のように《治療的》観点を優先させず、かといって福祉における介護や看護のように《世話をする》でもなく、授業者も学習者も《表現する人》として対等の立場に立って音楽活動を《楽しむ》、それ自体がきわめて目的的な自立した活動といえることができる。【丸山、2007：pp.28-29】

また、特徴として以下の点が挙げている。

- ・活動は多くの場合、集団で行われ、円型もしくは半円型になって座る。
- ・一人一人の表現は、その人の人格とおなじに尊重され受容される。したがって、技術的・音楽的完成度を求められたり、他とくらべて評価されたりすることもなく、その人の《いま、ここ》の感情や《その人らしさ》が受け入れられ、承認される。
- ・指導者による指示的・管理的な視線や介入はできるだけ慎まれ、非言語的な手段が多用される。【丸山、2007：p.29 より筆者要約】

音楽療法の活動内容と考え方を導入した音楽活動がしたいと考えていた筆者にとって丸山氏の一連の研究および実践事例(丸山2002、丸山2007)は、非常に示唆に富むものであった。

ノードフ・ロビンズ音楽療法および療法的音楽活動との出会いから、音楽科の授業ではなく「他者と共に音楽を楽しむ」ことを目的とした「音あそび」を行いたいと考えるに至り、少しずつ活動を開始し、2009年3月から親子を対象とした「音あそび」の活動を本格的に始動するに至った。

(3) 筆者の実践する「音あそび」の概要と特徴

筆者の実践する「音あそび」の目的は、集団で音楽の楽しさを共有することである。療法的音楽活動から大きな影響を受けており、特徴としては以下4点が挙げられる。

① 音楽療法の活動内容と考え方をベースにしていること。

活動内容としては、音楽療法のセッションで用いられる楽曲もしくはオリジナルの楽曲を用いる。主として、音楽療法士がセッションのために書いた楽曲を集めた楽曲集(生野里香ら(2001)、鈴木祐仁ら(2010)、下川英子(2009) ミッシェール・リットホルズら(2002)など)から適する楽曲を選択して実施している。音楽療法の楽曲を用いる理由は、楽譜がなくても活動が成立する、

練習を必要とせずすぐに子どもたちと音楽の楽しさを共有できる、という特質を兼ねた楽曲が非常に多いからである。

例えば、《一緒に鳴らそうよ》(小柳ゆ子作)という楽曲は、セラピストの合図に合わせてクライアントがトーンチャイムを鳴らす、というシンプルな活動内容である。しかしながら、この楽曲の持つ優しい雰囲気に含まれて、トーンチャイムの音色の美しさと、全員で一緒に鳴らすという成就感・達成感が味わえる楽曲である。筆者自身も非常に気に入っている活動であり、これまでに何度も取り上げてきた。スモールステップでのアプローチは必要だが、ほとんどの子どもが、みんなと一緒に鳴らし、成就感を味わえる楽曲となっている。例を挙げればきりがないが、このように音楽療法用の楽曲は、技術的な難しさをのりこえて、すぐに音楽の楽しさ、美しさを享受できる工夫がなされているものが非常に多いのが特徴と言えるだろう。筆者の「音あそび」では、音楽療法士がセッションのために書いた楽曲を用いる割合が多いが、それらの楽曲を手本として自らが作曲したオリジナル曲を使用する頻度も年を追うごとに増えてきている。

音楽療法の考え方を導入するという意味では、受容という概念を重視している。具体的な説明が難しい部分であるが、相手を受け入れること、待つこと、を大切にしている。

②個人ではなく、集団での活動であること。

対象が親子の場合は10名～20名程度、子どもだけの場合は、8名程度を1グループとして活動を実施している。集団で音楽の楽しさを共有することを目的としているため、対個人の「音あそび」は行っていない。活動内容もある程度人数がいるからこそ楽しさを味わえるものを用意するように心がけている。子どもだけの場合は、8名程度としているのは、筆者は通常1人で「音あそび」を行うため、目の届く人数の最大数という意味でこの人数を設定している。

③歌と打楽器を用いた活動が主体であること。

「音あそび」では、筆者が歌を歌い、参加者が打楽器で参加する活動が多い。使用する打楽器は、以下のようなものである。楽器は、鳴らすことが簡単であり、良い音のするもので、丈夫なものを選んで用意するようにしている。また、マレットもスポンジ、ゴム、芯材に毛糸を巻いたものなどを用意し、活動内容によって使われている。

シンバル	シェイカー (たまご型、フルーツ型)
フィンガーシンバル	オーシャンドラム
太鼓 (バスドラム、ジャンベ、サウンドシェイプ、フレームドラムなど)	スプリングドラム
タンバリン	レインスティック
ウッドブロック (2音のもの、8音のもの)	ウインドチャイム
ギロ (通常のもの、カエル型のもの)	カスタネット、すず (ベルト状のもの)
	トーンチャイム

④活動内容が流動的であること

「音あそび」の活動内容は、事前に大まかに決定し楽器を選定し準備を行うが、参加者の状況に合わせ、流動的に変化させる場合が多い。事前に用意した活動が対象者に適していないと判断した場合は活動を差し替えたり、子どもたちの創造性によって新たな活動がうまれる場合は子どもたちと創造の過程を楽しむことに移行したりもする。「音あそび」の目的は、「集団で音楽の楽しさを共有すること」と設定しているため、その目的からそれない範囲での活動内容の変更は大に行っている。ただし、その分、事後の振り返りには活動の準備と同程度、あるいはそれ以上の時間を費やしている。映像での記録が取れる場合は、映像をチェックしながら子どもの反応や活動の適性、筆者自身の介入について分析を行っている。単発の「音あそび」である場合は、次の機会に生かすために、継続性のある「音あそび」の場合は、次の活動を行う際の糧とするためである。映像の記録を分析するという視点は、ノードフ・ロビンズ音楽療法から示唆を受け取り入れたものである。

2. 実践事例の紹介

ここでは、筆者のこれまでの取組みについて、その概要と事例を紹介したい。

(1) 2009年3月～2011年3月までの取組み

筆者が「音あそび」を本格的に始動したのは、「諫早市こどもの城」という施設である。2009年3月から2011年3月までは、月に2～3日、「音あそび」を行ってきた。1日につき30分の「音あそび」を3回（親子で音あそびを2回、親子でドラムサークルを1回）実施してきた。この施設での難しさは、対象が不確定である点である。当日、来館者のうち、興味のある親子がその場で集まってくる、という形であるため、「音あそび」が始まってみないと対象者が誰で何人いるのか、が把握できない。参加者の中には、複数回参加している親子もいれば、初めての参加者もいる状態である。年齢も3～5歳児とその保護者の方と限定をかけるものの、場合によっては0歳児から小学生の子もだったり、おじいちゃんおばあちゃんの参加までである。対象の不確定性という難しさはあったものの、思わぬハプニングが活動を豊かにしてくれたり、未満児の思わぬ行動が参加者の心を穏やかにさせてくれたり、というギフトもたくさんいただいた現場であった。参加者の感想を一部紹介したい。

○今回初めて参加させてもらいましたが、とても楽しかったです。今日で3歳になる子供も上手にリズムをとって楽しんでいました。ありがとうございました。

○いつも楽しみにしています。子供にも覚えやすい音楽で家でも活用しています。自分が子供の時にこういう授業があれば音楽が好きになっていたと思います。長く続けてほしいです。

〇いつも楽しく参加させていただいています。こどもの城に行くと「サムさんのに行く！」とほりきっています。いろんな楽器をふれさせてもらえたら、と思います。いつも楽しい雰囲気です。こんでいるので今まで通りで十分です。

〇とても楽しかったです、家でも教えて頂いたリズム遊び楽しくやっています。子どもは喜び、親は優しい音色にいやされ、たのしい時間でした。次回が、今から待ち遠しいです。今日は、本当にありがとうございました。

〇童心にかえて楽しく遊びました。孫たちも楽しんだ様です。ありがとうございました。

〇30分という時間があっというまでした。2歳の孫が音楽を楽しんでいる様子を見させていただきとてもハッピーでした。ありがとうございました。

〇すばらしい時間でした。感動しました。もう少し時間長くしてほしい。もっとやりたかった。9ヶ月も4歳もとても楽しそうだった。

〇参加したのは、2回目ですが、今回も子供がとってもいい顔をしていました。普段目にするのではない楽器にも触れることができ、とても良い経験ができました。親子共々楽しみました。

〇ふつうは接することのできない珍しい楽器を使つてのコミュニケーション、とても楽しくて優しい気持ちになれました。30分あつという間なので、もう少し長くあつても楽しいかなと思いました。

〇とてもゆっくり静かなリズムで大人も良い気持ちになりました。楽器も沢山さわらせて頂いて良い思い出となりました。

〇初めて参加させていただきました。普段、テレビなどを通じて音を聞くことが多いので、生の音、楽器に触れることができてよかったです。

〇2回目の参加です。今日ものしかったです。親子で笑顔になれたのが嬉しかったです。是非また参加します。

以上のように、保護者が子どもの喜ぶ姿を見て微笑んでいる場面、子どもたちだけではなく大人たち自身が音楽を楽しんでいる場面がみられた実践現場であった。親子で参加していただく「音あそび」については、



コンサートホール主催のイベントにて実施した様子

保護者の方にもほっとする時間となるように活動を組み立てるようにしている。これも音楽療法（クライアントだけではなく、その家族のケアも視野に入れる）から示唆を得た視点である。

2009年以降、諫早市こどもの城の「音あそび」の参加者・見学者の中から「音あそび」の依頼を受ける機会がふえていった。具体的には、コンサートホール主催のイベントや県内の小学校への出前授業などである。これらについては、詳細は割愛するが、西田（2011）にてその一端を紹介している。

（2）今年度の取組み

今年度行った3つの事例について以下、詳細に紹介する。

① F 中学校 特別支援学級における実践事例

1) 概要

小学校2校、中学校1校の特別支援学級の交流会での実施である。

昨年度、一度実施しており、今年度で2回目となる。ただし、昨年度は小学校1校のみが対象であった。

対象：小学生6名、中学生4名、教員・支援員・保護者約15名 計 約25名

活動時間：60分

活動場所：音楽室

2) 活動内容の記録（VTRからの大まかな起こし）

時間経過	活動内容	意図や子どもたちの様子
0	○《こんにちは》白井裕美子作	○タンバリンを介したあいさつ
2	○たまごシェイカー回し	○アイスブレイクとしての活動
8	○たまごシェイカーによる活動 ・楽器の配布（1人2個）	○楽器の配布は、子どもが行う。 ・楽器を配布することでコミュニケーションを促すこと、また、手伝いができたことへの成就感も大切だと考えているため。
9	・鳴らし方の工夫	・「どうやって鳴らせるかな」と問いかけ、様々な奏法を発見し楽しむ。発見した奏法は、「○○くんの真似をしてみよう」という形で参加者全員で模倣する。真似をされる側はとても嬉し

		<p>そんな表情である。全員の真似をすることで、全員にスポットライトが当たるように配慮した。</p> <p>○「先生」ではなく、ともに音楽を楽しむ立場できていることを示すために音あそびの場合には、筆者のことを「先生」ではなく「サム」と呼んでくれるようお願いしている。今回は、自己紹介が遅れてしまった。</p> <p>○次の楽曲にあわせた演奏に向けた予備的な活動</p> <p>○「次は、音楽に合わせてできるかな」と誘いかけて演奏。一体感を感じながら演奏ができるように工夫された楽曲を演奏することで、満足感を得る。たまごシェイカーを打ち合わせることで拍手をし終了。</p> <p>○「集めてくれる人？」と誘いかけ、子どもに回収してもらう。</p> <p>○黒鍵のみを使用しペンタトニックとなるように配慮。</p> <p>・楽器の配布は、重いため中学生にお願いした。</p> <p>・先ずは、筆者と一対一でキャッチボールする。</p> <p>・相手に方向を見てトーンチャイムを鳴らし、音を届ける活動。自然と視線を合わせるができること、ボール（音）がいつまわってくるかわからないため集中を促せる、などコミュニケーションを促すのに適した活動。自分の番を待たずに自由に鳴らしてしまう子どもが多数。ここは筆者の反省点。</p> <p>・十分にトーンチャイムの楽しさを味わう。この活動をキャッチボールの前に入れるべきであった。</p> <p>○配布してあるペンタトニックに合わせて筆者がわらべうたの《一番星みつけた》を歌いながら、星がきらめく様子をウィンドチャイムにて表現する。次に子どもたちにもウィンドチャイムを鳴らしてもらう。トーンチャイムとウィンドチャイムの金属の響きはとてもよくマッチする。</p>
13	○自己紹介	
	○模倣	
	「サムのまねをしよう」	
15	○音楽に合わせて鳴らしてみよう	
	《たまごシェイカー！》西田治作	
17	○たまごシェイカーの回収	
18	○トーンチャイムによる	
	音のキャッチボール	
	・楽器の配布	
	・サムと音のキャッチボール	
	・好きな人に音を投げる・受け取る	
	・好きに鳴らしてみる	
23	○トーンチャイムとウィンド・チャイムによる《一番星みつけた》	

26	○黒鍵のトーンチャイムの回収	○中学生に回収してもらう。
27	○トーンチャイムによる和音奏 《赤鼻のトナカイ》 和音ごとにトーンチャイムを配布	○I、IV、Vの3つの和音を筆者の合図で演奏する和音奏。下川英子(2009)の活動。中学生が初めてに行い、次に小学生が行う、という順番で行った。和音奏は、短時間で行うには適した活動ではなかった。多少、混乱が生じていた。
34	○トーンチャイム回収	
35	○トーンチャイムの配布(A,C,E,G) ○《一緒に鳴らそうよ》小柳玲子作 の演奏	○子どもたちが演奏し、大人が聞く。またその逆を行うことで、お互いが演奏者一聴き手となることで音楽のプレゼントを送り合うイメージになる。
40	○トーンチャイムの回収	
41	○シンバルを用いた活動	○「どんな音がすると思う？」と問いかけ、想像させてから毛糸巻きのマレットで優しく叩いてみせる。予想したよりも優しい音に子どもたちが驚いている様子がうかがえる。シンバルという「ガシャーン」という大音量をイメージするためであろう。
43	○マレットの配布 ○一人一人、叩いてみる。	○子どもに配布してもらう。 ○まずは、自由に鳴らしてみる体験をしてもらう。順番に鳴らす、シンバルが飛んできたら鳴らす、という順番でたいた。次に「やさしく叩けるかな」と誘いかけて、強さをコントロールして叩くことを体験する。
47	○楽曲に合わせて演奏する 《とべとべシンバル》下川英子作	○音楽にあわせてシンバルをたたく。ふわふわとシンバルを漂わせながら楽器を提示することで、曲にあったイメージで活動ができる。子どもたちは、自分にシンバルが飛んでくるのを楽しみに待っている様子。
49	○マレットの回収	
50	○フィンガーシンバルによる活動	○ここでも「どんな音がすると思う」と問いかけ想像してから音を出してみる過程を踏んだ。このことで音への集中力が引き出せると毎回、感じている。
51	○一人一枚 配布する。	○お隣のお友達と打ち合わせてみる。次にお隣

55	○《さようならのうた》 よしだじゅんこ作にに合わせて打ち鳴らす	ではないお友達とも打ち鳴らしにいく。 ○中学生が全員に打ち鳴らしに回るので、コミュニケーションを図る。
57	○楽器の回収	○子どもに回収してもらおう。
58	○合唱 《いっしょに》西田治作	○《いっしょに》はサビの部分が「ありがとう」という歌詞の追いかけっことなる。交互に歌の中で「ありがとう」を伝え終了したいいと 考え、今回の最後の活動とした。
60	終了	

3) 参加者の感想

【今回、初めて参加する小学校の先生からの感想】

○音にとっても敏感で、初めてのこと、人、場所などを苦手になっている児童なので、「どれだけいっしょにできるかな？」と少々心配しながら参加しました。最初に、タンバリンを「タン」とたたいた姿を見て正直びっくりしました。卵型の楽器も気に入り、カシャカシャと耳元でならして楽しんでいました。その後の活動も笑顔を見せながら楽器を鳴らしたり、人がするのを見たり、聞いたりすることができていました。心地よい音は、居心地の良いものになるのだと感じました。そのため、気持ちがゆったりリラックスして、シンバルの大きな音も周りの状況も気にならず、色々な活動にチャレンジできたのだと思います。「いいよ。」「じゃうざだよ。」ということばや拍手にととてもうれしそうな表情をしていました。マレットをみんなに配る役をしおわり、イスに座りみんなから「よくできたね。」と声をかけられたときは、見ている私もうれしくなりました。とても満たされた時間を過ごしたようで、家に帰ってから表情が安定していて「ふだんと比べてとっても穏やかに過ごしていました。」と保護者の方からお話を聞きました。本当にありがとうございました。

【保護者の方からの感想】

○昨年につづき今年で2回目の授業でしたが、昨年とはちがいで他の小学校、そして中学校と一緒に出来たことはとても良かったと思っています。どの生徒も楽しそうに楽器をたたいたりしていました。1時間では短いような気もしましたが…。来年もぜひぜひ授業があればいいと思います。子供の生き生きと楽しそうにしている姿がとても印象に残っています。そして最後に先生のピアノはとても上手でした。

【ご参加いただいた先生から】

○初めて音遊びに参加させていただきました。始めは馴染めない自分がいて、一時間やれるだろうかという戸惑いがありました。しかし、子供たちの普段見せない動きや笑顔に、いつしか私も溶け込めた気がします。普段は音に敏感なK君が一回も耳を塞がなかったこと、(リズム感はある

と書いていましたが、)グッドタイミングで楽器を鳴らすことに感動しました。また、D君・Aさんを含む子供たちが音の強弱に合わせて軽くも強くも楽器を叩くこと、あんなにはしゃいでいるのに先生の話の時には落ち着いて話が聞けていたことも音あそびの力だと思いました。そして、やはり最後まで参加するのが難しいと思われた女の子が、フィンガーシンバルを持たせたことや、参加できた時のにはかんだ笑顔が忘れられません。先生の歌詞にもあるように、音あそびを通してみんながつながっていくのが感じられたこと、それは個性も生かされた中で一つになっていく姿の素晴らしさに出逢えました。胸がいっぱいになりました。また機会があれば参加できたらと思っています。有難うございました。

4) 所感

- ・活動時間が長かった。やはり45分が適正だと考える。もしくは、途中で休憩をはさむべきであった。ご参加いただいた保護者・先生の感想には「もっと長くても」というご意見をいくつか頂いたが、おそらく「あの活動内容であれば、時間がもう少し必要」という意味合いであろう。
- ・対象となる人数が多すぎた。子どもの数に対して大人の数が多かった点が反省点である。これは、「参観だけでよい」という参加者を筆者が巻き込んだために起こったことである。
- ・トーンチャイムの分担奏が短時間では、難しい活動であった。
筆者自身の指示の仕方に改善の余地があった。
- ・楽器の配布と回収を子どもたちが行うことは、参加者同士のコミュニケーションを促し満足感の得られる活動であるため、今度も大切にしたい。
- ・小中学生の交流ということで、活動を盛り込みすぎた。中学生は、小学生のお世話をしながら小学生との活動を楽しんでくれたので、次回からは小学生に合わせた活動内容で組み立ててよいと感じた。
- ・小中学生の交流、知らない者同士の交流を目指した会であったが、音楽を介することで早い段階で互いに笑顔になることができていたように思う。改めて音楽で交流することの良さを実感した事例であった。また、一部の子どもと筆者にとっては、一年ぶりの再会が嬉しい事例であった。

② M小学校 特別支援学級における実践事例

1) 概要

今回、初めの実施。保護者会でのレクレーション。時間は45分。

対象：子ども7名、保護者5名、教員・支援員4名 合計16名

場所：普通教室

2) 活動内容

VTRでの記録が取れなかったため、活動の流れのみ記載。

活動項目	詳細
<p>○活動の始まり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・タンバリン ・ジャンベ <p>○たまごシェイカーによる活動</p> <p>○シンバルによる活動</p> <p>○トーンチャイムによる活動</p> <p>○ウィンドチャイムによる活動</p>	<p>○タンバリンで挨拶 《こんにちは》に合わせてタンバリンを演奏。</p> <p>○ジャンベによるコール&レスポンスで挨拶をする。</p> <p>○シェイカー回しでアイスブレイク 「今日は失敗も楽しんでしまおう」というメッセージも合わせて伝える。</p> <p>○鳴らし方の工夫 「体のどこでならせるかな」という問いかけ。 発見した鳴らし方を全員で模倣。</p> <p>○《たまごシェイカー》西田治を全員で演奏。</p> <p>○たまごシェイカーで拍手して終了。</p> <p>○提示「どんな音がすると思う？」</p> <p>○自由に叩く。強くたたく。やさしくたたく。強弱をつけて叩くことをたのしむ。</p> <p>○《とべとべシンバル》下川英子 を演奏</p> <p>○自由にならす。みんなでたくさん鳴らす。みんなで揃えて一回鳴らす、音のキャッチボールなどの活動を行い、トーンチャイムと触れ合う。</p> <p>○《一緒に鳴らそうよ》を演奏 保護者が演奏し子どもが聴く。またその逆を行い、互いに演奏を聞きあう場面を作る。</p> <p>○まずは一人ずつ十分に触れて鳴らしてみる。</p> <p>○《さようならのうた》に合わせて演奏。</p>

3) 参加者の感想

【保護者の方からの感想】

- 今日はお忙しい中、子供達のためにありがとうございました。子供達のキラキラした眼が久しぶりに見れてすごうれしかったです。それにステキな音ありがとうございました。
- 今日は、本当に楽しい時間をありがとうございました。コンサートやイベントに連れていきたくても、動きが激しく大きな声を突然出したりするので、なかなか行けません。ですから今日の体験が本当に嬉しかったです。子ども達の目が輝いていましたね、本当にありがとうございました。
- 親子共々楽しむことができました。普段、音に合わせて物を使って体を動かすことがなかったので、家でも今日教わったことをしてみたいと思います。今日は、ありがとうございました。

○今日は、とても楽しい時間であつという間に過ぎてしまいました。本当に本当に楽しい素敵な音楽の世界を体験させていただきありがとうございました。私の子どもHは自閉症です。始めはちゃんとお友達と一緒に参加できるか心配だったのですが、西田先生のとても優しい瞳と声かけ…そしてとてもきれいな音色にひきこまれて、とても楽しい笑顔で参加できているHに涙が出そうでした。本当に嬉しい時間でした。本当にありがとうございました。

4) 所感

- ・①の事例で紹介したことと同様に、子どもたちに楽器を配布・回収してもらうことでコミュニケーションを促す効果を実感した事例であった。
- ・保護者の方にも楽しんでもらえるよう配慮して内容を構成した。

③長崎県内J保育園における実践事例

1) 概要

2011年4月から月に2日、定期的に訪問し音あそびを行っている。1日につき約2時間の活動である。時間割はおおよそ次の通り。

- ・0～1歳児 2クラス それぞれ15分
- ・2歳児 2クラス それぞれ15分
- ・3～5歳児 3クラス それぞれ20分

3～5歳児については、できるだけ年齢に近い子ども同士で8名程度のグループを作って活動している。グループ編成は、出席状況などを鑑みて毎回、保育士の先生に分けて頂いている。

月2回の活動となるため、その時々で活動内容は変化させている。これまでの事例と異なるのは、対象が毎回同じであり、継続的な音あそびの実践である点、対象も保護者などの親は参加せずに子どもたちだけである点である。

2) 活動内容

毎回、異なるためサンプルとして2012年1月のある1日の活動内容を紹介するにとどめる。

【0～1歳児】

活動項目	詳細
○歌でご挨拶	○《こんにちは》白井裕美子作 タンバリンを使用した活動。
○プラスチック製の鈴を用いた活動	○《シェイク、シェイク、ミュージック》 アラン・タリー作

<p>○たまごシェイカーを用いた活動</p> <p>○ウィンドチャイムを用いた活動</p>	<p>を使用して、筆者が子どもたちの体を震わせて鈴を鳴らす活動。</p> <p>○《みんなで鳴らす楽器の歌》生野里香作を使用し、音楽に合わせてシェイカーを振ることを楽しむ活動。</p> <p>○ウィンドチャイムそのものの音色を充分に感じたのち、《さようならのうた》よしだじゅんこ作に合わせて演奏し終了。</p>
---	---

【2歳児】

活動項目	詳細
<p>○導入</p> <p>○歌でご挨拶</p> <p>○プラスチック製の鈴を用いた活動</p> <p>○歌でさようなら</p>	<p>○ストップ&ゴー サムの動きに合わせて動く、止まる。</p> <p>○《こんにちは》臼井裕美子作 タンバリンを使用しての活動。</p> <p>○ストップ&ゴー</p> <p>○《シェイク、シェイク、ミュージック》 アラン・タリー作 を使用して、筆者が子どもたちの体を震わせて鈴を鳴らす活動。</p> <p>○《今日はこれでおしまい》西田治作を演奏。 手拍子を打つこと、「バイバイ」の掛け合いを楽しむ活動となっている。</p>

【3歳児】

活動項目	詳細
<p>○導入</p> <p>○歌でご挨拶</p> <p>○プラスチック製の鈴を用いた活動</p> <p>○たまごシェイカーを用いた活動</p>	<p>○ストップ&ゴー</p> <p>○《こんにちは》臼井裕美子作 タンバリンを使用しての活動。</p> <p>○ストップ&ゴー</p> <p>○《シェイク、シェイク、ミュージック》 アラン・タリー作 を使用して、筆者が子どもたちの体を震わせて鈴を鳴らす活動。</p> <p>○身体の色々な場所を使って楽器を鳴らす。 「どこで鳴らそうかな？」と問いかける。 《たまごシェイカー!》西田治作を使用し、音楽</p>

<p>○薄布を使用した活動</p> <p>○歌でさようなら</p>	<p>に合わせてシェイカーを振ることを楽しむ活動。途中、静止したり、左右に身体を動かすなどの身体運動を伴う活動。</p> <p>○《さようならのうた》よしだじゅんこ作に合わせてうす布を上下し、子どもたちは床に寝転がり布のふわふわする感覚を楽しむ活動である。</p> <p>○《今日はこれでおしまい》西田治作を演奏。手拍子を打つこと、「バイバイ」の掛け合いを楽しむ活動となっている。</p>
-----------------------------------	--

【4・5歳児】

活動項目	詳細
<p>○太鼓で挨拶</p> <p>○太鼓とシンバルを用いた活動</p> <p>○薄布を使用した活動</p>	<p>○ジャンベを用いてのコール&レスポンスで挨拶。</p> <p>○《ふたりの太鼓1・2・3》高橋友子作を2人ペアで演奏。太鼓2台とシンバルを順番に鳴らす活動である。前回は引き続き2回目の活動となり、2人でタイミングを合わせ演奏することができている。</p> <p>○《さようならのうた》よしだじゅんこ作に合わせてうす布を上下し、子どもたちは床に寝転がり布のふわふわする感覚を楽しむ活動である。</p>



↑ J 保育園で薄布を使用した活動



↑ J 保育園で太鼓を用いた活動

3) 参加者の感想

まだ年度の途中であることもあり、質問紙によるアンケート調査は行っていない。今後、調査を行い、保育者からみた音あそびの印象についてまとめたいと考えている。

4) 所感

【年齢による差】

年齢の特性よりも、今年度、初めて音あそびを導入したことが活動内容に影響していると考えられる。5歳児だからと急に複雑な音あそびを提供すればできるわけではなく、やはり容易なものからスモールステップで進んでいくことが重要である。今年度は初年度であったため、年齢による活動の差は少ないが、今後続けていくことで、年齢による活動内容の差をつけていくことができるものとする。

また、0～1歳児については、筆者は、当初、音あそびを実施しない予定であったが、園長先生からのアドバイスで実施することになったという経緯がある。4月当初は、泣いてばかりいた子どもたちも、今（2012年2月）では、筆者の顔を見ると近寄ってきて音楽に合わせてゆれたり、音楽がストップすると楽器を鳴らすのをやめたりと共に音楽することを楽しんでいる様子である。筆者の中でまだとらえきれていない0～1歳児については、今後、適する活動内容の開発が特に必要だと感じている。

【活動内容の体系化】

他の事例と異なる「対象が固定、継続性がある」ということは、活動内容に大きく影響する。子どもたちは、遊びながら楽器を使いこなせるようになり、次第に複雑な音あそびまで行うことができるようになるため、活動もある程度、系統立てていく必要があると考える。しかし、あくまでも「遊び」であるためトレーニング性が優位に立つ活動体系とならないようにしたい。

3. 考察 ——今後の研究課題——

これまでの実践、特に今年度実施した事例から以下6点の研究課題を見出すことができた。

(1) 音楽療法の音楽教育分野への応用

音楽科の授業では、「活動あって学びなし」に陥ってはならない、とよく言われる。学校教育の中で行われる以上、体系的で発展的に活動を積み重ねていくべきであり、子どもたちは楽しそうに活動しているが何を学んでいるのかが分からない、という状況は避けるべきだと筆者も考える。

しかし、それとともに「音楽を楽しむこと」そのものを目的とする活動も必要だと考えている。それは、趣味の領域で各家庭、各自が行えばよいとも考えられるが、それを提供する場が必要とされる時代なのではないだろうか。人々が集い音楽そのものを楽しむ機会が今日求められていると考

えている。丸山氏が述べる、楽しむこと自体が極めて目的的な活動が必要とされているのではないだろうか。

音楽療法では、音楽が学習の対象としてではなく、「共有するもの」として存在していると筆者はとらえている。クライアントとセラピストの間で共有される音楽は、時にはコミュニケーションのツールとして機能し、時にはただ楽しむためのものとして存在し、時には美的な鑑賞の対象として存在する。その多様性、柔軟性が音楽教育に示唆するものは大きい。音楽教育に携わる者が音楽療法へ高い関心を寄せるケースも増えてきているように見える。音楽療法士である吉田順子氏は、次のように述べる。

イギリスで音楽療法士の資格を取得し1998年に帰国して以来、音楽療法士になりたいという音楽家の方々にたくさんお目にかかってきました。最初のうちは、そのような方々と話をさせていただくときに、漠然とした疑問がしばしば浮かんできたことをよく憶えています。それは「すでに演奏家や音楽教師として立派に活躍されている方々が本当に『音楽療法士』に転身したいのかな？」というものでした。しかし、月日の流れとともに、多くのみなさんが本当に求めているのは、資格や職業といった枠組みの中で音楽療法士になることではなく、音楽を人と分かち合い、心健やかなるための方法なのではないだろうか、と感じられるようになってきました。【メルセデス・パブリチェビク著、吉田順子訳(2006)『みんなで楽しく音楽を！』 p.261 「あとがき」から】

音楽教育の分野へ音楽療法の考えや活動を持ち込むことは、容易にも見えるが、やはりそこには難しさが立ちほだかる。単に音楽療法の活動を持ち込んだだけでは意味がないからだ。今後は、音楽療法から音楽教育が何を取り入れ、学んでいくか、それを明確にしていく必要があると考える。

(2) 音楽療法が求められる背景の検討

音楽療法が音楽教育に示唆するものについての検討をするにあたっては、今日、音楽療法がなぜこれほどまでに注目を浴びるのか、というその背景について理解する必要があると考える。筆者の実践する単発の「音あそび」や出前授業に参加した方からは、「定期的な受講できる機会はないか」と尋ねられることが多々ある。なぜこのように、音楽そのものを楽しむことを目的とした活動が求められているのか、その背景についても検討していく必要があると考える。

現時点では、その背景としてコミュニティの崩壊が主たる要因なのではないかと仮説を立てている。コミュニティが存在し、地域行事が盛んに行われているころには、音楽の楽しさを共有する場が多々存在していたのではないだろうか。盆踊りや季節ごとのお祭りなどである。そういったものが失われていくことで、こういった活動が求められてきたのではないだろうか。この点については、今後、詳細に検討したい。

(3) 楽しさの質に関する研究

音楽活動の楽しさとは何であろうか。おそらくそれは多面的なものであり、さまざまな楽しさの側面があるように思える。この点については、根本的な議論が必要だろう。

ただし、筆者の実践している音あそびに関して述べるならば、二つの方向性があると見出すにいたった。それは、「遊園地的な楽しさ」と「公園的な楽しさ」である。前者は、単発の「音あそび」の際に必要な楽しさである。参加する子どもたちは遊園地に来たように非日常性の中で音楽を楽しむ。一つの活動は比較的短い時間で終了し、さまざまな活動を共にする。めまぐるしく変化する活動を前に子どもたちは目を輝かせ、次々と新しい活動を体験する。その中で、音楽の楽しさを参加者同士で共有するのだ。それに対し後者は、固定された対象を相手に定期的に行う音あそびに必要な楽しさである。遊園地的な楽しさは、毎日のように繰り返されたなら、おそらく飽きてしまうだろう。よって遊園地的な派手な活動はないものの、共に創造性を働かせて活動を考えだすような楽しさ、できなかったものができるようになる楽しさを共有できる活動が必要となる。これは、今年度、J保育園で実践し改めて気がついた点であった。

音楽の楽しさとは何か。共有するとはどういうことか。この点については今後の研究課題となる。

(4) 実施者の心理的スタンスに関する研究

これまでの実践を通して、実施者の心理的なスタンスの重要性が見いだせた。全く同じ活動であっても音楽を共有する活動ではなく、音楽を一方向的に与えてしまう、押し付けてしまう活動になることも経験してきた。これは、実施者の心理的スタンスの違いによるものであると考えている。いくら音楽療法の用楽曲・活動を行ったところで実施者が相手に押し付けるようなやり方や態度であれば、それらは魅力を失ってしまう。また、子どもとともに参加する保護者や教師の言葉がけ、眼差しの影響も大きい。実施者、保護者、教師の心理的スタンスとしては、やはり受容の概念が有効であると考えているが、より具体的な実施者の在り方に関する研究が必要だと考える。

この点において、筆者が現在注目しているのは、「プレイワーカー」という視点である。子どもの遊びをいかに支えるか、というプレイワーカーの視点が示唆するものは大きいと予測している。

(5) 具体的な活動内容にかかわる研究

① 活動内容決定にかかわる要因の明確化

J保育園の所感の部分でも述べたが、年齢によってその活動内容を設定できない場合もある。また、障害の有無もその決定的な要因とならない場合もある。音あそびの活動内容の決定にどのような要因が関係するのかを検討する必要がある。特に重要だと考える要素は、「単発か継続か」「参加者が固定か否か」である。今年度の事例を整理すると次のようになる。

定期開催だが参加者が不特定（諫早市こどもの城）

定期的であり対象者も固定（J 保育園）

単発（特別支援学級への出前授業）

やはり、それぞれの場において求められる活動が異なってくる。現在の所感を述べると、単発である場合は、「遊園地的な楽しさ」を提供できる活動が、固定の対象者に対しての継続的な場では、「遊園地的な楽しさ」だけでなく、「公園的な楽しさ」のいずれもが求められると考えられる。また、音あそびの実施者が筆者のようなゲストが行うのか、子どもたちと日常を共にしている者が行うのかでも内容の組み方に変更が必要であろう。それらの要因を整理することで、その場と対象者に適した活動内容をデザインしやすくなるのではないかと考える。

②具体的な活動内容の開発

音楽療法用の楽曲集は、実践的で非常に使いやすいものである。しかしながら、集団で音楽の楽しさを共有できる楽曲となると数は限られる。また、特殊な楽器に頼らず限られた楽器で効果的に活動を組んでいくことも必要だと感じている。シンバル一枚でも多様な活動ができるよう、その活動内容や新たな楽曲を作り出していくことが必要である。子どもたちとの実践の中で、そういったものを開発し、整理していくことも重要な課題である。

おわりに

本稿は、筆者のこれまでの「音あそび」に関する取り組みを整理し、今後の研究課題を抽出することを目的として執筆した。ここ4年間は、理論研究よりもとにかく実践を繰り返すことを重視してきたが、実践を通して見出された諸課題について、今後、数年間をかけて一つずつ理論的に整理していきたいと考えている。筆者のライフワークは、「人間と音楽の関係をサポートすること」である。理論・実践の両面から研究を進め、最終的には、ワークショップを通して子どもたちに直に還元していけるよう研鑽を積んでいきたい。



【コンサートホール主催のワークショップの様子】

引用・参考文献

- 生野 里花ら (2001) 『0 静かな森の大きな木—音楽療法のためのオリジナル曲集』 春秋社
- 下川 英子 (2009) 『統合保育・教育現場に応用する 音楽療法・音遊び』 音楽之友社
- 柴田 礼子 (2009) 『音楽指導ブック 子どものための たのしい音遊び 伝え合い、表現する力を育む』 音楽之友社
- 鈴木 祐仁ら (2010) 『音楽療法のためのオリジナル曲集 だれかの音がする』 春秋社
- 西田 治 (2011) 「教育支援訪問システムの事例報告—平成 22 年度の取組みから—」
『教育実践総合センター紀要 2011.3 第 10 号』 pp.143-153 長崎大学教育学部
- 丸山 忠璋 (2002) 『療法的音楽活動のすすめ—明日の教育と福祉のために』 春秋社
- 丸山 忠璋 (2007) 「音楽療法と音環境」『音楽教育実践ジャーナル 通巻 8 号』 pp.22-30 日本音楽教育学会
- ミッシェール・リットホルズら (2002) 『音楽療法のための小品集』
ヤマハ・ミュージックメディア
- メルセデス・パブリチェビク著、吉田順子訳 (2006) 『みんなで楽しく音楽を！』 音楽之友社
- the ミュージックセラピー編集部 (2005) 『音楽療法・レッスン・授業のためのセッション ネット帳—職人たちのおくりもの』 音楽之友社